

「目をつぶって耳を澄ますと西洋、目を開けて耳を塞ぐと日本」こんなことが、果たして実現できるのだろうか。中途半端な和洋折衷の公演は今までもあったが、ここまで徹底した企画は日本初のことだったという。2011年6月東京・渋谷のセルリアンタワー能楽堂で上演された『オペラ@能楽堂』は大成功を収め、その評判が遠くフランスまで届き、今年2月から3月にかけてツアーにやって来る。そして日本・スイス国交樹立150周年記念行事の一環としてスイスでも4公演が行われる。

この公演の演目は純粋なバロックオペラ2作品だ。ペルゴレージ作曲『リヴィエッタとトラッコロ』はインテルメッツォ(幕間劇)として書かれた喜劇だ。日本の幕間劇といえば狂言。兄の敵を討とうとする娘と、悪漢の男がだまし合いで対決するドタバタ劇の筋立ては狂言にピッタリ。バロック・バイオリンの桐山建志氏らピリオド楽器(*最下部参照)奏者達が客席前方に並び、なんと能楽師狂言方*大蔵流の善竹富太郎氏はイタリア語での歌唱をマスターし、ソプラノ歌手の白木あいさんは狂言装束での所作を学んで実現させた、洋の東西の融合である。

それに対してM・Aシャルパンティエ作曲『アクテオン』はギリシャ神話をテーマにした悲劇で、落命した主人公の魂が泉のほとりをさまよう場面など、まさに幽玄の世界であり、能スタイルでの上演に適している。能楽師シテ方*金春流の櫻間右陣氏が舞う脇で、普段は舞台中央に立って歌っているバロック歌手達が囃子方*の席に座り、袴・袴姿で地謡*の役柄に徹するのだ。

この企画・演出を手掛けているのはウィーン在住の演出家、伊香修吾氏だ。「オペラが日本に輸入されて約150年。オペラと日本人の相性は非常によい。世界中の一流歌劇場が入れ替わり立ち替わり招聘される東京のような街は、他に類を見ない。日本人はもともと、海外から取り入れたものを独自に発展させることに長けた民族なので、日本の伝統芸能の様式の中で、西洋のオペラを再生させるということが、そろそろ出来る時期なのではないか」「非人間的なものが舞台上を支配する点などで、能・狂言とオペラには共通点がある。日本と西欧の要素を本質の部分で一緒にさせたかった」と、インタビューで語ってくれた。

東大経済学部大学院卒の伊香氏は、「子供の頃から、何かをいじって形にする粘土細工のような事が好きでした。楽譜や台本という紙に書いてある二次元の世界を、自分の好きな方法で三次元化するという行為が変態的に好き」と自己分析する。その大好きなオペラの側にいたい一心で、博士課程に進むか就職を決めるかという時期にちょうど公募されていた新国立劇場の職に応募し、見事に採用された。そこに演出家として招かれたディヴィッド・エドワーズ氏の助手を務めた際に初めて「演出

家になりたい」と確信し、安定した職場を捨て、エドワーズ氏の招きで2002年イギリス留学を決めた。その後奇しくも、伊香氏が少年時代に初めて観たオペレッタ『こうもり』を演出していたロベルト・ヘルツルの助手を務める機会に恵まれ、ヘルツル氏の紹介でウィーンに拠点を移し今年で7年が経つ。

子供の頃から落語が大好きではあったが、ヨーロッパにばかり目を奪われていた伊香氏の見え方を変えた事件は東日本大震災だった。15歳で家を出るまで暮らした岩手県宮古市の実家が津波で流された。両親は偶然にもウィーンの息子を訪ねており無事であったが、空虚な気持ちで片付けをしながら「この作品を新たな出発の礎にしたい」と決意したという。

そんな彼の想いは観客にも受け入れられたようで、ポジティブな批評が並び、「普遍的なドラマを独自のスタイルで見せることに成功した」(読売新聞)、「能狂言の『足運び』の妙がバロックの典雅な響きと共鳴したこの日、和洋の達人たちが最善を尽くしてドラマと歌を密に結びつけた。東西の美学の自然な呼応を客席も存分に受け止めていた。」(音楽の友)のように、この斬新な手法は大変評価された。「西洋と東洋を橋渡しし、かつ舞台作品としての一体感をねらった」伊香氏の挑戦が実を結んだのだ。

そして3年後の仏瑞ツアーである。現在稽古も重ねられ準備が着々と進んでいるが、一行は2月18日に日本を立ち、パリの3公演を経てスイスへ到着する。このツアーで、和洋のいにしへの芸術がいかに融合できるかという強烈なインパクトを仏瑞に残していくだろう。

スイスに住んでいるうちに、自然と体内で日本と西欧が溶け合ってしまったご自身にピッタリの芸術を探していらっしゃる方は是非、以下の処方箋をお試し下さい。



第10回 オペラと能・狂言の融合

*『ピリオド楽器』

その曲が作られた時代に使われていた様式の楽器。古楽器。『狂言方』狂言の演者。/『シテ方』能の主役を演じる役者。『囃子方』囃子の演奏を担当する人。笛方、小鼓方、大鼓方、太鼓方の四役。『地謡(じうたい)』能楽の「地の文」の謡のことで、シテやワキの発言ではなく、状況説明や情景描写がなされる。

『オペラ@能楽堂』(Opera@Noh-Theater) 仏瑞ツアー

- 2月20、21、22日 パリ日本文化会館
Maison de la culture du Japon à Paris
- 2月25日 ジュネーヴ エスペランスセンター
Centre de l'Espérance
- 2月28日、3月1日 チューリッヒ リギブリック劇場
Theater Rigiblick www.facebook.com/theaterrigiblick
www.theater-rigiblick.ch/spielplan/newsletter.htm
- 3月4日 ローザンヌ 連邦工科大学ラーニングセンター
Ecole Polytechnique fédérale de Lausanne (EPFL)
Rolex Learning Center

